|  |
| --- |
| 関西農業史研究会130713　於大阪経済大学  **題目「近現代における福山義倉の歴史的展開」**  報告者；平下義記（学振ＰＤ） |

**はじめに―研究史整理と本報告の目的**

先行研究

・従来の名望家論は地域社会への「支配の代償」としての慈善的支出を指摘。「支配の客体」である地域社会との構造的連関、如何？　〔筒井・1989〕、〔高久・1997〕など

・義倉・社倉をめぐる研究。「百姓成立」論を切り口に、「封建的社会政策」と豪農商層の主体性を認める事例に大別、後者に地域社会の「成熟」を見出す。〔山崎・2007〕など

・福山義倉の研究史。経営面における地主的性格を指摘した豊田氏の論文を除けば、近現代における蓄積は相対的に薄く、今後のケーススタディを待つ状態。〔豊田・1972〕

福山義倉

　文化元年創立、福山藩の借財を地域の豪農商層が皆済、福山藩の下賜金が創業資本に。窮民救済や各種公益事業の推進を目的とし、金融業と莫大な地主経営（約120町歩）が経営基盤。明治33年に財団法人化。経営者は地域トップレベルの名望家層の世襲制。

分析視角

①近世と近代における「距離」（＝断絶性）を、存在形態の変化から測定していく。

②経営体としての義倉に着目、経営史的観点から近現代における展開を跡づける。

③地域社会の資金需要への対処に注目、義倉に固有の問題がどこにあったのか探る。

☆上記の問題群への接近を通じて、近現代における福山義倉の展開過程を、できうる限り実証的・多面的に明らかにしていくことが、本報告の目的！

**Ⅰ財団法人化までの道程―近世・近代の違いは？／なぜ財団法人となったのか？**

・近世期は創立者集団と福山藩士との協同運営体制（＝「保護」関係）であった。

・廃藩置県後、広島県は「保護願」を無視。運営は創立者集団のみに。利益分配の開始。

・士族は義倉の運営体制と事業内容を問題視、阿部家に請願（＝義倉事件）。

・阿部家はむしろ義倉側の立場を支持。家令・郡長を介して調停機能を発揮。

・その裏側で阿部家は義倉の組織変革に積極的に介入していった。

・義倉／士族の対立構造、名望家層は義倉を支持。地域社会は双方を「無視」。

・明治25年に広島県「保護」。しかし法人格は「聞置」のため、所有権は曖昧

・義倉は自身の正当性を阿部家との関係性に求めるが、郡長は規則から削除。

・最終的な「財団規定」は旧藩主には触れず、利益分配を曖昧化。公益性を強調

☆近世期との違いは、①経営者が創立者集団に限定されたこと、②救済などの事業が縮小したこと、③旧藩主との関係が「消滅」したことであり、義倉存立の制度的基盤の確立と組織的成熟の達成には、いわば近世期からの「飛躍」が重要な画期となっていた。

**Ⅱ法人化後における展開過程―経営面の特徴は？／どのように変化したのか？**

・財団法人化後の役員就任状況、相互に対等なものではない。

・創立者集団、それに連なる名望家層への手厚い保護。神野の専務理事不就任？

・貸借対照表の構成、いくつかの画期性を確認できる。時期区分の試み。

・小作料収入依存の経営構造は戦後改革期まで続く。

・他団体には経営基盤の拡充と新規事業が結びつけて認識されている。

・地域社会からの「信用」の調達を狙うため、資産運用は土地所有に「固執」。

・戦後改革期の激変は、農地改革の帰結であった。

☆義倉の経営展開にはいくつかの画期性がありつつも、その基盤は終戦期まで一貫して地主的土地所有にあった。経営体的側面と公益組織的側面の関係性が地域社会への再分配のあり方を左右していた可能性を示唆するものであろう。

**Ⅲ事業展開と地域社会―地域社会の資金需要への対応如何？／時期的変化は？**

・各年の純益と事業支出の実績。時期的な変化に着目。

・事業支出が少ないのは、義倉自体が「改革中」のためであった。

・義倉事件後の事業支出の増大は、地域社会に対する他律的方策と評される。

・想定以上の資金需要に困惑する「迷惑」発言。地域社会の期待？

・他の団体との相乗り寄付は嫌う。費用的面よりも義倉の独自性を顕示？

・義倉や旧藩主の救済を当然視、他の名望家の「慈善的行為」を促す新聞。

・旧来の寄付はもう辞めたい。支出構成の変化における義倉側の規定性を示唆。

☆義倉の事業展開は、近現代における独自の歴史経路がかなりの程度に強く反映しており、その具体的内容は、地域レベルの再分配機能を担う意志決定担当者と、多様な資金需要を有する地域社会の、双方の活動の活発化によって軌道づけられていたと想定されよう。

**おわりに―本報告の総括**

・名望家の慈善支出。支配の正当性（筒井）／公益組織の担い手の性格を重視（山崎）

・名望家層と地域社会の構造的連関に着目。福山義倉を取り上げ、その近現代における独自の展開過程をできうる限り実証的に明らかにしたことが、本報告の研究史的意義！

☆近現代における福山義倉の展開は近世期との「断絶」が起点にあり、そこから名望家層が公益性の体現を目指す過程として示されたが、その背後には、地域社会の資金需要と、それへの義倉の対応が繰り返されていたことに注意せねばならない。義倉の抱えていた固有の課題とは、経営体的側面と公益組織的側面の矛盾的契機を絶えず押さえ込んでいくことを要請されていた点にあったと思われる。